令和７年度

シ　ラ　バ　ス

（講義・実習）

（2025年4月～2026年3月）

２学年

茨城歯科専門学校　歯科衛生士科

歯科衛生士科

入学者の受け入れ方針（アドミッションポリシー）

歯科衛生士の専門職を目指そうとする、以下のような資質を備えた人を求めています。

1　歯科衛生士になりたいという強い意志を持つ人

2　歯科衛生学の修得に必要な基礎学力を有する人

3　協調性と思いやりを持って行動できる人

卒業認定・称号授与方針（ディプロマポリシー）

本校所定の単位を取得し、以下の能力を身につけた者を卒業認定し、専門士（医療専門課程）の称号を授与します。

1　高い倫理観を持ち、歯科衛生学の基本的な知識と技術を身につけ専門職としての責務を果たすことができる。

2　科学的根拠を持って歯科保健活動を行うとともに、多職種とのコミュニケーションのもと地域の保健・医療・福祉に貢献することができる。

3　生涯を通じて自己研鑽し資質向上を目指すことができる。

目　　次

２学年

(人文科学)
心理学…… 2－1
行動科学…… 2－3
コミュニケーション学…… 2－5
(社会科学)
社会学…… 2－7
(外国語)
英会話…… 2－9
(口腔解剖学)
口腔機能学…… 2－11
(病理学)
口腔病理学…… 2－13
(口腔衛生学)
公衆歯科衛生学…… 2－15
(歯科放射線学)
歯科放射線学…… 2－17
(歯科補綴学)
歯科補綴学…… 2－19
(口腔外科学)
口腔外科学　…… 2－21
(小児歯科学)
小児歯科学…… 2－23
(障害者歯科学)
障害者歯科学…… 2－25
(矯正歯科学)
歯科矯正学…… 2－27
(高齢者歯科学)
高齢者歯科学…… 2－29
(歯科予防処置論)
歯科予防処置論Ⅱ実習…… 2－31
口腔保健管理…… 2－33
(歯科保健指導論)
歯科保健指導論Ⅱ（訪問歯科保健指導）… 2－35
歯科保健指導論Ⅱ実習…… 2－37
栄養指導…… 2－39
(歯科診療補助論)
歯科診療補助論Ⅱ実習…… 2－41
(看護学)
看護学…… 2－43
(隣接医学)
隣接医学…… 2－45
(歯科衛生研究)
歯科衛生研究Ⅰ…… 2－47

授　業　科　目	心理学（講義） 必修　16 時間（前期）	担当教員	木村　正治
授業目標・教育方針と概要	心理学を学ぶことは人間理解に役立つ。対人援助職である歯科衛生士にとって必要な、心理学および臨床心理学の基礎知識について学ぶ。また、自身の健康管理に役立つセルフコントロール法の習得も目指す。		
達　成　目　標	１．知覚、学習、記憶、動機、感情、性格などの理論を理解する。 ２．多様な心理アセスメントについて理解する。 ３．心の健康についての理解や、ストレス対処法を身につける。 ４．愛着とトラウマについて理解する。		
授　業　計　画	第１回：授業全体の説明と見る・聞く・感じるこころ 第２回：学ぶ・覚えるこころ 第３回：やる気の心理 第４回：喜怒哀楽のこころ 第５回：ストレスについて　リラクセーション法演習 第６回：その人らしさの心理ーパーソナリティ 第７回：健康なこころ 第８回：愛着とトラウマ		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>授業は教科書から外れた内容や体験的な演習も多用するので、意欲をもって取り組むこと。疑問や意見などは積極的に質問すること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
心理学の基礎的な理解および応用が出来るかを問う。レポートや定期試験の結果で成績評価を行う。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果をもとに、再試験やレポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>「行動科学」、「カウンセリング」の基礎となる。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ「心理学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	行動科学（講義） 必修　16 時間（前期）	担当教員	橘内　久美
授業目標・教育方針と概要	人間の行動がどのように方向づけられているのか、具体的な日常の場面を想定し、行動について考える。		
達　成　目　標	行動科学の基本的な概念を認識し、自分や他者の行動に対して、多角的な視点から解釈ができるようになる。		
授　業　計　画	第１回　ガイダンス、人間の行動理論とその活用① 第２回　人間の行動理論とその活用② 第３回　人間の認知・感情 第４回　記憶 第５回　行動の動機づけ 第６回　ストレスと防衛機制 第７回　社会心理学・集団とは 第８回　パーソナリティと精神障害・発達障害 （※状況に応じて変更することがあります。）		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>一般的な意見ではなく、自分自身の意思や意見を表現し、他人の意見にも耳を傾けようとすることを尊重する。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 〜 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 〜 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 〜 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
出席状況、レポート、試験により評価する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>必要に応じて、再レポートもしくは試験を課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>「心理学」の授業と相互補完的な関係にある。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>「心理学・入門」改訂版　心理学はこんなに面白い　有斐閣アルマ
その他、必要に応じて配布資料あり</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	コミュニケーション学(講義) 必修　20時間（前期）	担当教員	田寺　尚子
授業目標・教育方針と概要	受付・接遇応対能力を高める事により医療現場・医院への患者からの印象を高める事ができる。すなわち接遇能力を習得することは、医療現場のサービス向上、患者との信頼関係の構築、トラブルや苦情のリスク管理の視点から、必須の課題である。 この講義では、接遇の基本と現場における具体的な言動について実践的に学ぶとともに、歯科衛生士としての心構えや応対・マナーについて自ら考える機会を設け、実践レベルでのスキルを習得する。		
達　成　目　標	１．接遇の基本を学び、医療現場で対応できる言葉、態度を習得する。 ２．職場における応対・マナーについて学び、実践できる能力を習得する。 ３．話し方、苦情対応などについて学び、適切なコミュニケーション能力を習得する。 ４．以上を踏まえ、ドクターとの接し方・言葉づかい、また効果的なチームワークの大切さを習得する。		
授　業　計　画	第１回　接遇とは（第一印象の大切さ、挨拶の基本、身だしなみ、態度） 第２回　敬語と文章（敬語の使い方、信頼関係を築く言葉づかい） 第３回　傾聴力、質問力と確認、伝え方 第４回　患者様視点を考えたコミュニケーション 第５回　受付・診療室の応対（基本と実践）、ロールプレイング 第６回　電話応対（電話応対の基本、心構え、マナーのポイント） 第７回　電話応対ロールプレイ（電話を受ける、かける、苦情対応） 第８回　自己理解と患者様理解 第９回　捉え方と感情理解について 第10回　クレーム対応（診療室での事例対応、仕事上手になるために）と発展		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>参加型の授業とし、発言や発表を投げかけ、実践形式の学習を行う。
現実に起こりうる状況において適切な対応ができるよう、体験学習のためのロールプレイを行う。
積極的に取り組んで練習すること。
欠席した場合は、その単元についてのレポートを提出すること。
受講の服装は、原則として臨床実習と同様に身だしなみを整えること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table><tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr><tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr></table>授業において、敬語や話し方、マナーについて随時、練習問題を行い、確認作業を行う。
最終筆記試験により、練習問題で行った総合的な内容についての理解度を評価する。
実践的能力は、授業においての実践形式学習における接遇能力について判断し、評価を行う。
成績は、上記を総合的に判断して評価する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>試験の結果や実践学習の状況をもとに、再試験や再レポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>診療所、市町村保健センター、介護施設、小学校等への校外実習における挨拶の仕方や実習態度、言葉づかい、また、歯科衛生士としての心構え・気配りなどに通じる。
学校生活における人間関係のコミュニケーションや、すべての授業の受講態度の基礎となる。</td></tr>
<tr><td>教科書</td><td>「医療に従事する人のための患者接遇マナー基本テキスト」改訂版
日本能率協会マネジメントセンター</td></tr>
<tr><td>参考書</td><td>・接遇研修（財団法人公務研究協議会）
・接遇インストラクター指導者マニュアル（日総研）
・歯科スタッフのマナーと実践マニュアル（財団法人口腔保健協会）
・平林郁の接遇道　人を喜ばせる応対のかたちと心（大和書房）
・患者さんの心と信頼をつかむコトバづかいと話し方（クインテッセンス出版）
・院内での正しいマナーとコトバづかい（クインテッセンス出版）</td></tr>
</table>

授　業　科　目	社会学（講義） 必修　24時間（後期）	担当教員	工藤　堅一
授業目標・教育方針と概要	Ⅰ）社会学は広範な領域を研究対象としている。 本講義では身近な日常とのつながりを意識しつつ、社会学の基礎基本の一部を概観し、社会学の持つ、広さ・深さ・面白さに触れてほしい。 Ⅱ）社会学と歯科学に対する知識と理解を深め、豊かな人間性と確かな専門性を身につけようと意欲する、期待される職能人（歯科衛生士）になってもらいたい。		
達　成　目　標	1．職域社会の一員となる自覚を持って現代社会の特質を具体的に理解し、複雑にみえる社会の問題や現象への関心を高める。 2．現代社会の多様な問題を概観しつつ、歯科医療に携わる者としての社会観、倫理観・職業観の基礎を確立する。		
授　業　計　画	第１回　社会学とはー社会学の発見と創造 第２回　社会化（socialization）と社会的教育の４つの形式 第３回　アイデンティティー役割と役柄、理解と誤解、ジョハリの窓 第４回　医の倫理とプロフェッショナリズムー信用と信頼、ラポール 第５回　社会環境の変化ー働くということ、クレーム対応 第６回　社会学的想像力ー歯科衛生士としての倫理観、スティグマ、他 第７回　医療者の社会心理ー第３の労働「感情労働」 第８回　医療の質と安全ーヒヤリハット、インシデント、信頼性設計 第９回　３つのコミュニケーションー医療面接を一例に 第10回　感染症と人間行動ー多様化する情報と確実性効果 第11回　情報・ネット社会ー人間中心のAI社会原則 第12回　総復習及びこれからの社会学ー希望の社会学 ※授業では、2025年問題を念頭に、社会学一般についての関連事項を補完補足しながら、社会歯科学の基本項目を選択的に学習する。内容が隣接するものや幾つかの視点からアプローチすべきテーマは、関連する回にわたって解説する場合がある。したがってテーマが重複する場合や新たにタイムリーなニュースを加味する場合があることを申し添える。また、第２回以降は前回の復習と補足等を行い、知識を整理し、理解を確実なものにするよう努める。		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>・ノートはしっかり取ること。
・出席は毎時間取るので無断で欠席しないこと。
・積極的な質問や発言を期待している。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 〜 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 〜 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 〜 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
・基本として定期試験の結果で成績評価を行う。
ただし、授業への取り組み（出席状況、授業態度、提出物等）も加味する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>・定期試験の結果によって、再試験、レポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>・職能人として働く場であり、暮らしを営む人生の舞台である「今、ここにある社会」に関心を持つことで､他のすべての授業にも興味関心を抱き、学ぶ意欲を喚起するきっかけになる。
・広範な分野と新しい可能性を含んで、発展・変化し続けている科目の一つである。
・社会学を社会歯科学から学ぶことで、広く人間生活を観察し改善していこうとする、きっかけの一つになることを期待する。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>・尾崎哲則他編「スタンダード社会歯科学」第８版　学建書院
テキストは、講義では選択的に用いるが、資料としても活用できるので、講義後の自学学習にも適している。
なお、テキスト以外の項目は、授業で補足する。</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>・参考文献は授業内で必要に応じて紹介する。</td></tr>
</table>

授　業　科　目	英会話（講義） 必修　16 時間（前期）	担当教員	セファー・ケスキン
授業目標・教育方針と概要	話す英語を学んで、外国人患者との会話が出来るようになること。 また、自信を持って英語を話せるようになること。		
達　成　目　標	１．英語を話すことに自信を持つ ２．グループ作業（ペアやグループになって人前で英語を話す） ３．ジェスチャーを交えての会話が出来るようになる ４．模擬会話で積極的に英語を話す		
授　業　計　画	第１回　家族についての会話 第２回　食べ物についての会話 第３回　家と生活エリアについての会話 第４回　スポーツについての会話 第５回　テレビについての会話 第６回　休暇についての会話 第７回　レストランについての会話 第８回　ファッションについての会話		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>授業に積極的に参加すること</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table><tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr><tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr></table>筆記テスト結果で成績を評価する</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>テストに 1 回で合格するのみ</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>基礎分野として、英会話を受講することで、外国人患者と自信を持って英語を話せるよう身につける科目となる。</td></tr>
<tr><td>教科書</td><td>教科書は使用せず、毎回プリントを配布予定</td></tr>
<tr><td>参考書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	口腔機能学（講義） 必修　16 時間（前期）	担当教員	阿部　伸一 市川　敬一 野口　拓 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	口腔機能学は人体解剖学・口腔解剖学で学んだことを基礎として、歯科衛生士として日常の臨床で携わる口腔領域の動き（摂食・嚥下機能等）に対し、骨、筋、神経などの諸器官がどのように協調して行われているかということをより詳細に習得することを目標とする。		
達　成　目　標	１．基礎歯科医学と臨床歯科医学の関連性について理解する。 ２．摂食・嚥下機能と口腔周囲の器官の働きについて理解する。 ３．加齢に伴う口腔周囲の器官の変化について理解する。		
授　業　計　画	第１回　口腔機能学総論 第２回　摂食嚥下機能総論 第３回　摂食嚥下機能各論（関与する骨、筋について） 第４回　摂食嚥下機能各論（関与する神経について） 第５回　加齢に伴う口腔周囲の変化とその機能について　その１ 第６回　加齢に伴う口腔周囲の変化とその機能について　その２ 第７～８回　　まとめ		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>出席は毎時間取るので無断で欠席はしないこと。
わからないところは積極的に質問をすること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
定期試験では達成目標のリストに挙げた事柄とそれぞれの相互関係を理解しているかを見る。定期試験の結果で成績評価を行う。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果をもとに、再試験やレポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>1年次に履修した人体解剖学、口腔解剖学と臨床歯科医学を関連させる教科であると考える。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>1）歯科衛生学シリーズ　人体の構造と機能 1
「解剖学・組織発生学・生理学」　医歯薬出版
2）歯科衛生学シリーズ　歯・口腔の構造と機能
「口腔解剖学・口腔組織発生学・口腔生理学」　医歯薬出版
3）解剖学を学ぶための必須演習　全身骨学　学習サイドノート　わかば出版
4）基本のきほん　摂食嚥下の機能解剖　医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>摂食・嚥下のメカニズム　解剖生理編　井出吉信・山田好秋監修
(CD-ROM)</td></tr>
</table>

授業科目	口腔病理学（講義） 必修　20時間（後期）	担当教員	橋本　貞充、村松　敬 鷲見　正美 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	口腔領域は他の部ではみられないような歯牙や歯周組織などの歯に関連する組織（歯原性組織）や唾液腺組織などがある複雑な器官であり、そこでおきる様々な疾患についての幅広い知識を得る。本教科では「受身の学問」「暗記の学問」から「理解する学問」をめざし、様々な症例や画像を多用して興味のある授業をおこなっていく。		
達成目標	１．口腔粘膜疾患の病態を説明できる ２．歯髄疾患、根尖性病変の病態を説明できる ３．歯周疾患の発症メカニズム、臨床所見、病態、組織学的変化を説明できる ４．口腔顎顔面領域に発生する腫瘍を説明できる ５．口腔顎顔面領域に発生する嚢胞を説明できる ６．唾液腺疾患を説明できる ７．口腔領域の創傷治癒を説明できる ８．顎骨、顎関節に発生する疾患を説明できる ９．全身疾患と口腔疾患の関係を説明できる 10．他教科との関連を位置付けられる		
授業計画	２学年　口腔病理学 第１回　う蝕 第２回　歯の付着物・歯の発育異常・損傷 第３回　歯髄組織の病変・根尖組織の病変 第４回　歯周組織の病変 第５回　歯周組織の治癒・加齢 第６回　エプーリス・セメント質の増生 第７回　抜歯創の治癒・口腔領域の奇形 第８回　顎骨病変・嚢胞（歯原性／非歯原性） 第９回　口腔粘膜病変・唾液腺の病変 第10回　口腔腫瘍（歯原性／非歯原性）・まとめ		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>特になし。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
全講義終了後に筆記試験をおこなう。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>本試験と同等の筆記による再試験を行う。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>口腔病理学は、解剖学、組織学、生理学などの基盤の上で、口腔領域に生じる様々な病変を理解するものであり、実際の歯科臨床と密接に関連する。</td></tr>
<tr><td>教科書</td><td>歯科衛生学シリーズ
疾病の成り立ち及び回復過程の促進１　「病理学・口腔病理学」　医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参考書</td><td>配布プリント等</td></tr>
</table>

授業科目	公衆歯科衛生学（講義） 必修　32 時間（前期）	担当教員	杉原　直樹 佐藤　涼一 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	包括的な保健・医療・福祉（介護）を理解し、保健医療の分野における公衆歯科衛生学の重要性を理解する。公衆歯科衛生学の知識を身につけ、歯科衛生士として地域における保健・医療・福祉（介護）の活動の中で、たえず思考し、広い視野と社会的洞察力で展開できる能力を習得する。地域保健活動における計画・立案に参画でき、医療職・行政官・ケースワーカー・住民組織などと協調し、地域における組織活動に携わることができること。		
達成目標	１．国際的な規模から日本国内における保健・医療・福祉（介護）のシステムを理解する。 ２．公衆歯科衛生に関連する法律を理解する。 ３．ライフステージで行われている口腔保健活動を理解する。 ４．地域における口腔の維持増進のための方法を説明する。		
授業計画	第 1 回　公衆歯科衛生学概論１　公衆歯科衛生学とは 疾病の自然史と予防の概念 第 2 回　公衆歯科衛生学概論２　PHC とヘルスプロモーション 健康教育とエンパワメント 地域保健法、健康増進法 第 3 回　母子保健１　母子保健に関連する基本的事項、母子保健法 第 4 回　母子保健２　日本における母子保健 １歳６か月児および 3 歳児歯科健康診査 第 5 回　学校保健１　学校保健の領域構造、学校保健安全法 第 6 回　学校保健２　学校における健康診断と学校歯科保健 第 7 回　学校保健３　学校歯科保健：定期健康診断（歯・口腔） 第 8 回　成人歯科保健１　口腔保健行動、口腔と全身との関係 第 9 回　成人歯科保健２　歯周疾患検診、8020 運動 第 10 回　産業歯科保健　労働安全衛生法、健康診断、THP 歯科に関連する特殊健康診断 第 11 回　高齢者歯科保健１　老人の医療・保健・介護 第 12 回　高齢者歯科保健２　高齢者の歯科保健事業 第 13 回　障害者歯科保健　ICF、ノーマライゼーション、 日本の障害者対策 第 14 回　災害時歯科保健　救急医療、災害医療 第 15 回　国際歯科保健　国際協力とは、国際保健医療協力の状況、 WHO、国際協力機構 第 16 回　期末試験対策・まとめ		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>○毎回､講義用プリント（配布）あるいはノートに講義内容を記録すること。
○配布した講義プリントは毎回必ず持ってくること。
○講義用プリントは定期的に回収し、点検する。
○分からないところは講義中あるいは講義後に質問すること
（時間内で問題を解決し理解すること)。
○講義用配布プリントは、各自定期試験まで保存しておくこと。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table><tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr><tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr></table>○授業態度（講義ノート提出）および定期試験（筆記試験）
○講義ノートを提出しない者は、未提出の回数によって成績を減点する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>講義ノート提出および定期試験の結果、基準（60%）に達しない者について再試験を課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>専門基礎分野として、保健医療の分野において、公衆歯科衛生学は重要となる。関連する科目（衛生学、衛生行政、社会福祉、口腔衛生学、衛生統計学、歯科予防処置、歯科保健指導、口腔保健管理）も理解すること。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ
歯・口腔の健康と予防に関わる人間と社会の仕組み１「保健生態学」
医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>国民衛生の動向　2025 ／ 2026
（購入の必要はありません。必要な部分は講義中に配布）</td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科放射線学（講義） 必修　　24時間（前期）	担当教員	渥美　龍雅 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	本講義は、将来歯科衛生士として患者や術者の防護管理も配慮した適切な撮影補助や機器の管理もできるようになるために、放射線の発生、生物学的影響、防護および管理を中心とした放射線の基礎から正常画像解剖、病的像およびCT、磁気共鳴画像検査（MRI）等の各種画像検査法についても修得する。		
達　成　目　標	１．エックス線の原理および特徴を説明できる ２．エックス線検査の役割およびリスクを説明できる ３．口内法、口外法の原理および特徴を説明できる ４．CT、MRI、超音波、核医学検査の特徴を説明できる ５．放射線防護、影響、法的規制および放射線治療を説明できる ６．歯周組織、顎骨病変の正常および病的像を説明できる		
授　業　計　画	第１回　放射線の発生と歯科用エックス線装置 第２回　口内法エックス線検査、現像・デジタル処理 第３回　口内法（二等分法、平行法）実習① 第４回　口内法（二等分法、平行法）実習② 第５回　口外法、パノラマエックス線検査 第６回　パノラマエックス線撮影実習，口内法読影 第７回　放射線の生物学的作用と放射線治療 第８回　放射線の防護、影響および法的規制 第９回　中間テスト 第10回　全身用CT、歯科用CBCT、MRI検査、超音波検査 第11回　正常画像と病的画像 第12回　まとめ、実践問題演習		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>予習、復習を必ず行うこと。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 〜 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 〜 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 〜 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
講義への参加度、平常点、参加意欲 10%
中間試験 10%
まとめ（学年末）試験 80%
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>達成評価に満たないものには、再試験を課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>授業の一環として口内法（二等分法、平行法)、口外法（パノラマエックス線写真）の実習を行う。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生士講座「歯科放射線学」 永末書店</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>「Q&A」で学ぶ歯科放射学・SBOS 講義
金田隆 編集 学研書院</td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科補綴学（講義） 必修　24 時間（前期）	担当教員	伊藤　佑樹 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	歯科補綴学の目標は、口腔やそのまわりの組織及び全身を考えながら、一本の歯の一部分の欠損から全ての歯の欠損そして顎顔面や軟組織の欠損まで、歯の喪失及びそれに伴うまわりの組織の変化で起きてくる口腔あるいは顔面の変形の回復、及び口腔のいろいろな機能（咬む・飲み込む・発音する）の低下を、人工物を設けることにより回復させ、かつ歯や顎顔面・軟組織の欠損・喪失に続いて生じる弊害を予防することにある。そして、これにより健康寿命の延伸と QOL の維持・向上を図ることができる。 以上の事を理解してもらい、かつ臨床における実際の治療法を習得してもらう。		
達　成　目　標	１．補綴歯科治療の目的を概説できる。 ２．歯の欠損に伴う生理的変化を説明できる。 ３．補綴装置の種類とその特徴を概説できる。 ４．補綴歯科治療における歯科衛生士の役割を概説できる。		
授　業　計　画	第 1 回：〔Ⅰ編〕 補綴歯科治療の基礎 １章：歯科補綴の概要 第 2 回：　２章：補綴歯科治療の基礎知識　（その１） 第 3 回：　２章：　〃　（その２） 第 4 回：〔Ⅱ編〕 補綴歯科治療の実際と歯科衛生士の役割 １章：補綴歯科治療における検査 第 5 回：　２章：クラウン・ブリッジ治療　（その１） 第 6 回：　２章：　〃　（その２） 第 7 回：　２章：　〃　（その３） 第 8 回：　３章：有床義歯治療　（その１） 第 9 回：　３章：　〃　（その２） 第 10 回：　３章：　〃　（その３） 第 11 回：　４章：インプラント治療 第 12 回：　５章：特殊な口腔内装置を用いる治療 ６章：補綴歯科治療における器材の管理		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>授業内容にそった補綴装置を授業中持って来るので、それを見て、さわって、なるべく授業中に理解するように。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
達成目標に挙げた内容を理解しているか、定期試験にてチェックし成績を評価する。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果により、再試験を行う。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>歯科補綴学は臨床科目であり、「口腔形態の変化や諸機能の減弱を本来の状態に復帰させる」という、歯科治療全体の流れのなかで、ほぼ最終部分を担う学問である。
また『歯科診療補助論　第２版』、『歯科機器』や『歯科材料』などの関連教本の内容ともリンクしている。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ 「歯科補綴学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授業科目	口腔外科学（講義） 必修　28時間（前期）	担当教員	松尾　朗 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	歯科の２大疾患むし歯と歯周病ですが、日常の歯科診療ではそれ以外にも様々な疾患を取り扱っており、その多くは口腔外科と関連します。また、今回のコロナ禍で、口腔領域が如何に感染のリスクが高く、感染防御対策が重要であるか再認識されました。口腔外科の講義では、歯と口に関連する様々な疾患について、その原因、主要症状、治療法、さらに、感染防御や麻酔に関する知識および歯科衛生士の役割を習得します。		
達成目標	１．口腔外科で取り扱う様々な疾患の原因、主要症状、治療法について理解する。 ２．歯科における感染防御対策、特に滅菌消毒の必要性、その方法について理解する。 ３．歯科麻酔について理解する。 ４．上記について、歯科衛生士としての診療介助の方法を習得する。		
授業計画	第１回　口腔外科総論、顎顔面領域の診察と診断 第２回　炎症性疾患 第３回　全身疾患を有する患者の歯科治療 第４回　感染防御法 第５回　バイタルサイン、局所麻酔 第６回　全身麻酔、精神鎮静法 第７回　神経疾患・顔面領域の慢性疼痛 第８回　粘膜疾患、唾液腺疾患 第９回　外傷 第10回　救命救急処置 第11回　抜歯を含む口腔外科小手術とスタンダードプリコーション 第12回　インプラント手術と清潔操作 第13回　先天性疾患、発育異常、顎関節疾患 第14回　腫瘍・嚢胞・類似疾患		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>教科書に準じて講義を進めますが勧めますが、実際の講義はスライドを中心に、多くの症例を供覧し実際の診療に役立つ知識を解説しますのでよく聞いて下さい。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
定期試験の結果で成績評価を行います。
定期試験問題は、口腔外科の広い範囲についての理解力を見るために、国家試験形式で出題します。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験で合格点に達しない者には、再試験を課します。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>口腔外科は臨床科目であり、その理解のためには、解剖学、病理学、生理学、薬理学、微生物学など、幅広い基礎科目の知識が必要とされます。
その一方で、口腔外科手術で行われる清潔操作や感染症を持った患者さんへの感染防御対策は、ポストコロナ時代の新しい歯科診療の基本であり、他の臨床科目でも役立つと期待されます。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ　「口腔外科学・歯科麻酔学」第２版　医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	小児歯科学（講義） 必修　24 時間（前期）	担当教員	塩野　康裕 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	小児歯科学の目的は、胎生期から成長発達して成人にいたる間の小児の口腔領域の正常な発育をはかり、その健全な発育を傷害する異常や疾病について、その予防と治療を習得する。それらの知識を使用して、口腔の健康管理を行い、健全な口腔機能を育成するための理論や方法を習得させる事である。		
達　成　目　標	１．小児の発育過程（心身・頭蓋顔面顎・歯列咬合歯を含む） ２．小児の歯科疾患の特徴を説明できる ３．小児歯科診療体系を説明できる ４．小児の口腔健康管理の実施が出来る ５．小児患者（障害児を含む）の診療補助に必要な知識を理解し診療補助の実施が出来る		
授　業　計　画	第 1 回　全体の授業内容（シラバス）の説明と口腔の健康 口腔の健康管理 第 2 回　心身の発育 第 3 回　頭蓋・顔面・顎の発育 第 4 回　歯列・咬合の発育と異常 第 5 回　歯の発育と異常 第 6 回　乳歯・幼若永久歯の特徴 第 7 回　小児の口腔疾患（う蝕・軟組織の異常も含む） 小児期の特徴と歯科的問題 第 8 回　小児の口腔保健管理計画（診療計画） 第 9 回　小児への対応法 第 10 回　小児の診療補助における原則 第 11 回　小児の診査・修復・歯内療法における診療補助 第 12 回　小児の外科・咬合誘導・機能障害における診療補助 心身障害児の歯科治療		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>出欠は毎時間とるので欠席しないこと。
どの程度理解しているかを視るため時々質問をするが成績には関係しない。
解らないことは積極的に質問すること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
定期試験では達成目標のリストに挙げたことがらの意味を理解し、問題に応用して解くことができることを見る。定期試験の結果で成績評価を行う。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果の状況をもとに、再試験やレポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>小児の診療補助は講義だけでは理解し難いのでチェアーサイドで演習を行う。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ「小児歯科学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	障害者歯科学（講義） 必修　20 時間（前期）	担当教員	塩野　康裕 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	障害者に対して安全・快適で質の高い歯科医療を行うために、歯科衛生士として必要な障害者歯科医療についての基本的知識を習得する。		
達　成　目　標	１．障害者について説明する。 ２．障害者歯科の意義について説明する。 ３．障害の種類と歯科的特徴について説明する。 ４．障害者の行動調整について説明する。 ５．障害に応じた歯科治療上の注意点について説明する。 ６．障害者の歯科保健指導と口腔保健管理について説明する。 ７．地域における障害者歯科保健医療について説明する。 ８．障害者歯科医療におけるリスクと安全管理について説明する。		
授　業　計　画	第１回　基礎知識 障害の概念 第２回　障害の種類と歯科的特徴１ 精神発達・心理的発達と行動障害 第３回　障害の種類と歯科的特徴２ 神経・運動障害 第４回　障害の種類と歯科的特徴３ 感覚障害　発音・構音障害　精神及び行動の障害 第５回　障害の種類と歯科的特徴４ 精神及び行動の障害 第６回　障害の種類と歯科的特徴５ 染色体異常に伴う障害　摂食嚥下障害 障害のある人への虐待 第７回　障害児者の歯科治療１ 行動調整 第８回　障害児者の歯科治療２ 健康支援と口腔管理 第９回　障害児者の歯科治療３ リスク評価と安全管理 第10回　１～９回まとめ		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>解らないことは積極的に質問すること</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table><tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr><tr><td>優</td><td>85 〜 100 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>良</td><td>70 〜 84 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>可</td><td>60 〜 69 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr></table>定期試験の結果で成績評価を行う。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果を基に、再試験もしくはレポートを課す場合がある。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>障害者歯科は、保存、補綴、外科、麻酔科、予防歯科など全てを包括して障害のある人に総合的に歯科医療を行う。そのため、全ての臨床科目に関連している。</td></tr>
<tr><td>教科書</td><td>歯科衛生学シリーズ「障害者歯科学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参考書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科矯正学（講義） 必修　22 時間（前期）	担当教員	若松　孝典 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	歯並びやかみ合わせの不正によって生じる障害を認識し、矯正治療の重要性を総合的に修得する。 それに必要な生物学的、物理学的（力学）な基礎知識を理解する。		
達　成　目　標	１．歯、歯周組織、顎とそれらを包括する顎の正常な発育を理解する。 ２．顎顔面の不正な発育、局所的原因によって引き起こされる不正咬合を理解する。 ３．矯正治療を行うための、診断、症例分析、歯牙移動のメカニズムを理解する。 ４．矯正装置について充分に理解する。		
授　業　計　画	第 1 回　矯正歯科治療の概要 第 2 回　成長発育　　頭部・顔面の成長発育 第 3 回　成長発育　　頭部・顔面の成長発育 第 4 回　正常咬合 第 5 回　不正咬合 第 6 回　原因論 第 7 回　矯正歯科診断 第 8 回　矯正歯科治療と力 第 9 回　矯正歯科治療と力 第 10 回　矯正装置 第 11 回　矯正装置 保定 ・矯正治療における歯科衛生士の役割		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>欠席は避けるようにし、欠席した時には積極的に質問をし、その時間の講義内容を良く修得する事。場合によってはレポートの提出をする。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
定期試験による結果で成績評価をする。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>再試験やレポート提出を課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>歯科医療の中で各科の授業と密接な関係があるが、特に小児歯科とのかかわりが深い。
また、矯正治療は新しい咬合を構築するので、歯科全体の知識の把握が必要である。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ　第２版 「歯科矯正学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	高齢者歯科学（講義） 必修　30 時間（前期）	担当教員	萩原　敏之 （実務経験教員） 歯科医師
授業目標・教育方針と概要	超高齢社会に対応した歯科医学を修得する。すなわち、患者である高齢者の社会的問題、身体的・精神心理的変化および全身疾患、口腔疾患を理解したうえで、口腔健康管理や歯科保健指導が行える知識を習得する。また、在宅、介護施設、病院における事例と歯科衛生過程とを関連付けることができるよう習得する。		
達　成　目　標	１．高齢者を取り巻く社会および環境問題について理解できる。 ２．加齢による身体的・精神心理的変化について理解できる。 ３．高齢者に多い全身疾患・障害および口腔疾患について理解できる。 ４．高齢者の状態の把握ができる。 ５．高齢者の口腔健康管理ができる。 ６．高齢者の摂食嚥下リハビリテーションができる。 ７．高齢者に関わる医療と介護の概要を説明できる。 ８．高齢者に関わる歯科衛生士として実践できる。		
授　業　計　画	２年生時 第 １ 回　高齢者歯科と歯科衛生士の役割、口腔健康管理 第 ２ 回　高齢者を取り巻く社会的問題、法制度、地域包括ケアシステム 第 ３ 回　高齢者の居住形態・施設および入院設備の特徴 第 ４ 回　加齢に伴う身体的、精神・心理的変化 第 ５ 回　高齢者に多い全身疾患・障害について 第 ６ 回　高齢者に多い口腔疾患について 第 ７ 回　高齢者の状態の把握、臨床検査 第 ８ 回　高齢者の栄養状態、薬剤服用 第 ９ 回　健康な高齢者の口腔健康管理 第 10 回　周術期・急性期・回復期の高齢者への口腔健康管理 第 11 回　慢性期・終末期の高齢者への口腔健康管理 第 12 回　摂食嚥下の評価、嚥下訓練と対応 第 13 回　在宅および介護施設における摂食嚥下リハビリテーション 第 14 回　高齢者に関わる医療と介護、在宅歯科医療 第 15 回　歯科衛生過程・事例研修、国際生活機能分類の活用と事例		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>・出席は毎時間とるので無断欠席しないこと
・予習復習すること
・質問は積極的にすること</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table><tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr><tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr></table>・定期試験は筆記試験を行う
・適時レポート提出を課す
・定期試験の結果およびレポートにて成績評価を行う</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果状況をもとに再試験やレポートを課す</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>・訪問歯科保健指導
・病院歯科実習
・摂食嚥下指導
・高齢者歯科学は、ほぼすべての歯科臨床科目の上に学ぶべき応用科目である</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ「高齢者歯科学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科予防処置論Ⅱ実習（実習） 必修　60 時間（前期･後期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	歯科予防処置論Ⅰで学んだ基礎知識・技術を基盤として、更に臨床に応じた手技を実践できることを目的とし実習を行う。		
達　成　目　標	１．パワースケーラーの目的を理解し操作できる。 ２．ＰＭＴＣの目的を理解し操作できる。 ３．歯面清掃器を操作できる。 ４．口腔内の変化を理解することができる。 ５．一連の流れに沿って相互実習ができる。 ６．臨地実習の内容理解・技術習得ができる。		
授　業　計　画	第１回　超音波・エアスケーラー実習 第２回　超音波・エアスケーラーマニキン実習 第３回　〃 第４回　超音波・エアスケーラー相互実習 第５回　〃 第６回　エアーフロー実習 第７回　エアーフロー相互実習 第８回　〃 第９回　ＰＭＴＣ実習 第10回　ＰＭＴＣ相互実習 第11回　〃 第12回　復習実習① 第13回　〃 第14回　復習実習② 第15回　〃 第16回　スケーリングマニキン　立位 第17回　スケーリング相互　立位 第18回　〃 第19回　衛生過程（情報収集） 第20回　〃 第21回　衛生過程（計画） 第22回　〃 第23回　衛生過程（介入①） 第24回　〃 第25回　衛生過程（介入②） 第26回　〃 第27回　衛生過程（介入③） 第28回　〃		

<table>
<tr><td></td><td>第 29 回　復習実習
第 30 回　　〃</td></tr>
<tr><td>履修上の注意</td><td>出席は毎時間取るので、無断で欠席しないこと。
分からない点は進んで質問すること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
実技試験
実習の際の忘れ物も評価に含まれる</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>実技再試験やレポートを課す</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>歯科医療の基礎知識、専門的技術、他職種の専門的分野の知識を習得したことで、口腔内で起こっている情報を正しく分析し、判断し、推論して仮説を立てていく科学的思考を養う歯科衛生士教育をする。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ　「歯科予防処置論・歯科保健指導論」　医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>最新歯科衛生士教本
「歯科予防処置論・歯科保健指導論」第２版　医歯薬出版</td></tr>
</table>

授業科目	口腔保健管理（講義） 必修　20時間（前期）	担当教員	安藤　陽子 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	本科は、各教科で習得した知識を臨床でどのように実践するのか、学術と臨床を結ぶ教科。実際の症例を踏まえ、疑似体験し、本来の歯科衛生士の役割を学ぶ。 臨床において、口腔内だけでなく、全身・心身の健康管理のできる歯科衛生士となるために、社会人としての心構えや医療人としての観察力、想像力、コミュニケーション力を向上、習得する。		
達成目標	１．歯科衛生士としての心構え、社会人としてのマナーを確認する ２．口腔疾患を理解し、分かりやすく説明できる ３．口腔観察・医療面接に基づき、個々に合わせた保健指導ができる ４．「目的」を考えながら行動することができる		
授業計画	第１回　プロフェッショナルな歯科衛生士となるために 第２回　口腔疾患と口腔観察 第３回　患者を知る－問診、全身疾患と薬、生活習慣、業務記録 第４回　口腔内診査と歯周検査 第５回　口腔清掃指導 第６回　スケーリング、ルートプレーニング、PMTC 第７回　〈実習〉患者を診る①－プロービングと保健指導 第８回　〈実習〉患者を診る②－術者磨きとPMTC 第９回　予防とメインテナンス 第10回　総括		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>本科は、総合科目でもあるため、各章の関連科目を一読し授業に臨むこと。
宿題、課題は次回授業までに済ませておくこと。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td><table><tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr><tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr><tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr></table>定期試験結果及び授業態度、実習の取り組みや実技等、総合的に評価する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>それぞれの不足点に応じた再試験やレポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>「口腔保健管理」とは、歯科衛生士業務の主幹となる重要な科目であり、すべての授業や実習との関連性があるため、それぞれの分野を十分理解しておく必要がある。</td></tr>
<tr><td>教科書</td><td>・歯科衛生学シリーズ「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版
・日常臨床＆チーム医療に活かせる
「歯科衛生士臨床　ビジュアルハンドブック」 クインテッセンス出版</td></tr>
<tr><td>参考書</td><td></td></tr>
</table>

授業科目	歯科保健指導論Ⅱ(訪問歯科保健指導) (講義) 必修　30時間（前期）	担当教員	竹中　京子 (実務経験教員) 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	歯科衛生士として口腔健康管理について理解し、在宅で生活している要介護者や障害を持った方に対し、口の健康を保ち、会話を楽しみ、生涯おいしく食事を味わい、尊厳ある生活を保てるよう支援し、本人や家族に寄り添うことのできる歯科衛生士の育成。歯科衛生士として専門知識を身につけ、技術の向上を図る。また多職種の専門性を理解する。 災害時における口腔健康管理について理解する。		
達成目標	１．口腔健康管理について理解する ２．訪問口腔ケアに関わる人と制度を理解する ３．訪問口腔ケアに際して基本の心構えができること ４．相手の心理状態や家族を理解する ５．訪問口腔ケアの目的と効果について理解できること ６．在宅療養者の全身状態や口腔内の観察ができること ７．口腔アセスメント、ケアプランが作成できる ８．多職種を理解し連携を図ることができる ９．災害時における口腔健康管理について理解する		
授業計画	第１、２回　訪問口腔ケアに入る前の心構え　ビデオ学習 第３、４回　訪問口腔ケアの実際 ・麻痺の疑似体験、総合実習（くるリーナブラシ、モアブラシ、スポンジブラシ他） ・食前体操（ハロー歯ロー体操)、ごっくん体操 第５～８回　事例から学ぶ ・口腔ケアアセスメント作成（グループワーク） ・高齢者に対する口腔機能向上 ・災害時での口腔ケアについて ・パッククッキング 第９～12回　ベット上での相互実習 寝たきりの高齢者に対する口腔ケア マナボットから学ぶ口腔ケア 義歯の取り扱い方、着脱と清掃について 局部義歯・総義歯 孤立歯の清掃について 第13回　歯科衛生アセスメントとしての情報収集と情報整理 第14回　地域歯科保健活動における健康教育 第15回　地域歯科保健活動のフィールド		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>欠席しないこと</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
・学科試験による評価
・授業態度を加味して評価する場合もある</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>復習と再試験で対応</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>在宅療養者が増え、尊厳ある人生を支援するための、口腔健康管理が重要である。関連する科目（高齢者歯科学、障害者歯科学、歯科保健指導）も十分理解すること。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ
「歯科予防処置論・歯科保健指導論」　医歯薬出版
牛山京子の在宅訪問における口腔ケア
きれいな口・動く口・食べる口　医歯薬出版
黒岩恭子の口腔リハビリ＆口腔ケア　デンタルダイヤモンド社</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>・口から食べることへの支援（要介護高齢者の口腔ケア）
加藤武彦　編
・誤嚥性肺炎を予防する口腔ケア　下巻　米山武義　小山珠美
田中靖代　黒岩恭子　共著
・顔面体操　黒岩恭子　著
・パッククッキング　山崎幸江　著
・黒岩恭子の口腔リハビリ＆口腔ケア　黒岩恭子　著
・なぜ「黒岩恭子の口腔ケア＆口腔リハビリ」は食べられる口になるのか
北村清一郎　編著
・呼吸リハビリテーション（基礎概念と呼吸介助手技）
黒澤一　佐野裕子　共著
・よくわかる歯科衛生過程　全国歯科衛生士教育協議会　編
・口腔機能へのアプローチ　菊谷武　田村文誉　水上美樹　編著
・歯科衛生学シリーズ「歯科診療補助論」　医歯薬出版
・歯科衛生学シリーズ「高齢者歯科学」　医歯薬出版
・歯科衛生学シリーズ「障害者歯科学」　医歯薬出版</td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科保健指導論Ⅱ実習 必修　36 時間（前期･後期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	歯科保健指導および健康教育を行うために必要な基礎知識、歯科衛生士としての役割を理解し臨床および地域歯科保健活動に対応しうる知識・技術・態度を習得する		
達　成　目　標	１．患者に実施した保健指導の手順・考え・評価を報告する ２．患者に適した口腔清掃方法を伝達できる ３．業務記録の記載ができる ４．幼児期・学齢期の発達段階に沿った保健教育計画を立案する ５．幼児期・学齢期に応じた指導媒体の工夫をする		
授　業　計　画	第 1 回　高齢者実習 第 2 回　〃 第 3 回　幼児期における歯科保健指導（媒体作成含む） 第 4 回　〃 第 5 回　〃 第 6 回　〃 第 7 回　〃 第 8 回　〃 第 9 回　〃 第 10 回　〃 第 11 回　学齢期における歯科保健指導（媒体作成含む） 第 12 回　〃 第 13 回　〃 第 14 回　〃 第 15 回　〃 第 16 回　〃 第 17 回　〃 第 18 回　〃		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>基礎知識を学びながら手技を体得する</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
実技試験
また、場合によっては実技試験で合格していても再チェックテストを受けることもある</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>レポートを課す</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>各ライフステージに合わせて、問題分析から解決法、動機付けからブラッシングテクニック、食生活など健康教育を実践できるよう教育する。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	栄養指導（講義） 必修　24 時間（前期）	担当教員	塙　良子 （実務経験教員） 管理栄養士
授業目標・教育方針と概要	栄養学は食品に含まれる栄養素とそのはたらきや食事と健康との関係を学ぶ学問である。 口腔健康管理と全身の健康との深い関連性が注目されている現在、栄養学を学び、修得・活用することで、生活習慣と栄養状態を考慮した支援が可能となり、健康維持や疾病予防、生活習慣病の管理につなげる。さらに実生活に役立つ食事の基本を習得する。		
達　成　目　標	1．栄養素の種類とそのはたらき、体内での消化・吸収のしくみを理解する 2．食生活を取り巻く施策や食の安全について理解する 3．栄養バランスのとれた食事を理解し、実践できる 4．ライフステージ別における栄養を理解し、望ましい食生活の改善につなげる 5．栄養ケア・マネジメントを理解する		
授　業　計　画	第 1 回　歯科衛生士が栄養学を学ぶ意義 第 2 回　栄養素の種類とはたらき 第 3 回　栄養素の種類とはたらき 第 4 回　栄養素の種類とはたらき 第 5 回　栄養素の消化・吸収 第 6 回　健康と栄養 第 7 回　食事の基本 第 8 回　ライフステージと栄養（妊娠・授乳期、乳・幼児期） 第 9 回　ライフステージと栄養（学童期、思春期、成人期） 第 10 回　ライフステージと栄養（高齢期） 第 11 回　栄養ケア・マネジメント 第 12 回　栄養ケア・マネジメント		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>１．無断欠席しないこと。
２．わからないところは質問すること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
定期試験の結果で成績評価を行なう。
授業態度および講義中のワークシート内容を加味する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>定期試験の結果をもとに、再試験やレポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>「歯科保健指導」や「歯科予防処置」に関する教科の充実のためには、特に基礎となる科目である。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生学シリーズ　人体の構造と機能３「栄養学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>歯科衛生学シリーズ 「歯科予防処置論・歯科保健指導論」 医歯薬出版</td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科診療補助論Ⅱ実習 必修　30 時間（前期･後期）	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	円滑な歯科診療補助を行うために必要な知識・技能・態度を修得する。		
達　成　目　標	１．成形修復処置の流れに沿って歯科診療補助および介助ができる。 ２．鋳造修復処置の流れに沿って歯科診療補助および介助ができる。 ３．歯内療法処置の流れに沿って歯科診療補助および介助ができる。 ４．歯周療法処置の流れに沿って歯科診療補助および介助ができる。 ５．外科処置の流れに沿って歯科診療補助および介助ができる。 ６．矯正処置の流れに沿って歯科診療補助および介助ができる。 ７．医療安全ならびに感染予防を実施することができる。 ８．歯科診療の補助を行うことができる。 ９．患者に対する接遇ができる。		
授　業　計　画	第１回　デンタルセッティング 第２回　　〃 第３回　現像 第４回　復習実習① 第５回　　〃 第６回　症例説明 第７回　口腔外科（共同動作） 第８回　　〃 第９回　復習実習② 第 10 回　　〃 第 11 回　復習実習③ 第 12 回　　〃 第 13 回　復習実習④ 第 14 回　　〃 第 15 回　復習実習⑤		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>臨床的知識を学びながら手技を体得する</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 〜 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 〜 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 〜 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
実技試験（実技小テスト、提出物の採点。提出日などを含む）
実習に関して、態度・言動・準備品不足なども評価の対象となる</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>再試験を実施する。
場合によっては実技試験で合格していても再チェックテストを受けることもある。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>歯科診療補助の治療の内容や、用途にあった器材の準備や取り扱いなどの技術の習得や、チーム医療の一員としてのコミュニケーションスキルも学ぶ。</td></tr>
<tr><td>教科書</td><td>歯科衛生学シリーズ「歯科診療補助論」 医歯薬出版
歯科医療における国際標準感染予防対策テキスト滅菌・消毒・洗浄 医歯薬出版
歯科衛生学シリーズ「歯科機器」 医歯薬出版
歯科衛生学シリーズ「歯科材料」 医歯薬出版
第４版　イラストと写真でわかる歯科材料の基礎　永末書店
新・歯科衛生士教育マニュアル「保存修復」 クインテッセンス出版
歯科衛生学シリーズ「保存修復学・歯内療法学」 医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参考書</td><td></td></tr>
</table>

授　業　科　目	看護学（講義） 選択　16 時間（前期）	担当教員	堀川　彰子 （実務経験教員） 看護師
授業目標・教育方針と概要	看護とはなにか、また看護の対象である人間とはどんな存在であるかを学び、看護の目的である人間の健康について基本的な事項を知る。また様々な理由で生活支援を要する人々の心と体の仕組みについても理解する。		
達　成　目　標	１．看護の対象者としての人間を学び、よりよい生活支援の方法が分かる。 ２．健康な生活を送るための環境を学び、その健康問題と改善の方向性が理解できる。		
授　業　計　画	第１回　看護の歴史 第２回　看護とは 第３回　看護の対象（１）（人間の理解） 第４回　看護の対象（２）（患者の理解） 第５回　保健・医療・福祉のしくみと看護 第６回　看護の実施（１）（看護活動の種類、疾病の経過と看護活動） 第７回　看護の実施（２）（継続看護、医療安全、感染管理） 第８回　看護の実施（３）（地域医療活動）		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>１．講義は欠席のないようにすること。
２．既習の学習内容を統合し活用すること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 〜 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 〜 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 〜 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
１．主観的問題と客観的問題を組み合わせて筆記試験を行う。
２．筆記試験のほか、レポート・授業態度・出席状況などを加味して総合的に評価する。</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>再度試験又はレポートを課す。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>現在、医療・看護・福祉の分野において包括的な取り組みがなされ、他職種との連携が不可欠である。なかでも広域的に活動し、医療関係職種のなかで最大の従事者数を持つ看護職の概要を理解することは、医療・福祉分野を理解する一助となる。
同時に、歯科衛生士の職務の対象は人間であり、人間の理解、また健康問題を通しての課題解決の方法を学ぶ本科目は、将来の職務実践上きわめて重要となる。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>歯科衛生士のための看護学大意　第４版　医歯薬出版</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>介護職員初任者研修テキスト　第３版　ミネルヴァ書房
必要に応じプリントを配布する</td></tr>
</table>

授　業　科　目	隣接医学（講義） 選択　16 時間（前期）	担当教員	仙波　美千世 （実務経験教員） 看護師
授業目標・教育方針と概要	人々は、生まれてから死を迎えるまで、疾病予防から治療、介護に至るまで、健康の多様なニーズに応じた保健医療福祉サービスの提供されることを期待している。ライフサイクルと健康について学ぶ。		
達　成　目　標	授業で学んだことを臨床場面で応用出来るよう理解を深める。		
授　業　計　画	第１回　ライフサイクルと健康 第２回　人々の健康状態 第３回　生活習慣病① 第４回　生活習慣病② 第５回　健康増進対策① 第６回　健康増進対策② 第７回　保健医療チーム 第８回　終末期の介護		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>他の教科とも関連するので、復習をする。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
筆記試験とレポートと講義の出席と授業の理解度で評価する。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>再試験や追試験での結果を加味して総合的に評価する。</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>疾病予防から治療、介護に至るまで関連する科目も理解し、臨床において応用につながる科目となる。</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>介護職員初任者研修テキスト　第３版　ミネルヴァ書房</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td>授業によるプリント</td></tr>
</table>

授　業　科　目	歯科衛生研究Ⅰ 必修　30時間	担当教員	専任教員 （実務経験教員） 歯科衛生士
授業目標・教育方針と概要	本校で１年間学び講義や実習の経験を通して、自分のめざす歯科衛生士はどのようなものかを改めて考え、その考えを文章にまとめることでイメージを明確にする。 さらに、まとめた内容を発表することで他者に自分の考えの伝え方を学習する。		
達　成　目　標	１　自分のめざす歯科衛生士はどのようなものかを改めて考え、その考えを文章にまとめることができる。 ２　まとめた内容を発表することができる。 ３　発表の経緯をふまえて論文を完成させることができる。		
授　業　計　画	第１回 入学時に考えていた歯科衛生士像のイメージを掲げる。または、本校歯科衛生歯科に入学した理由を３項目以上掲げ文章で説明する。 第２回・第３回 本校で１年間学び講義や実習で得た知識や経験を通して次のことについて感じたこと考えたことを掲げ文章にまとめる。 第４回 歯科衛生士が業務を進めていくうえで必要と考える連携が必要な職種はどのような職種があるか。考えられる職種を掲げて理由を文章で説明する。 第５回・第６回 第１回から第４回目までに作成した内容の進捗状況を発表する。 第７回 現在（２年生の時点）で考える歯科衛生士像のイメージを５項目以上掲げ文章で説明する。 第８回・第９回 自分の考えを発表するにあたっての発表原稿を作成する。 第 10 回・第 11 回 発表 第 12 回・第 13 回 発表をふまえて論文を完成させる。 第 14 回・第 15 回 歯科衛生研究Ⅰのまとめ		

<table>
<tr><td>履修上の注意</td><td>授業計画に沿って論文作成を進めること。</td></tr>
<tr><td>成績評価の方法
達成評価の基準、およびその方法</td><td>
<table>
<tr><th>評　定</th><th>評価基準</th><th>合否の別</th></tr>
<tr><td>優</td><td>85 ～ 100 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>良</td><td>70 ～ 84 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>可</td><td>60 ～ 69 点</td><td>合　格</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>60 点未満</td><td>不合格</td></tr>
</table>
授業の取組状況及び発表状況、論文内容を総合的に評価する。
</td></tr>
<tr><td>水準に達しない学生に対する対応</td><td>論文の再提出</td></tr>
<tr><td>・関連する授業・演習・実験・カリキュラム全体の中での位置付け</td><td>これまでに授業や演習で学んだ内容全般</td></tr>
<tr><td>教　科　書</td><td>学校から配布する歯科衛生研究Ⅰ事項に基づき進める。</td></tr>
<tr><td>参　考　書</td><td></td></tr>
</table>

～歯科衛生士の誓い～

私たちは将来歯科衛生士として，歯科医師と共に，歯科疾患の予防および口腔衛生の向上のために，その任務を忠実に守ります。

ここに臨床の場にのぞむに当たり，とくに次のことを誓います。

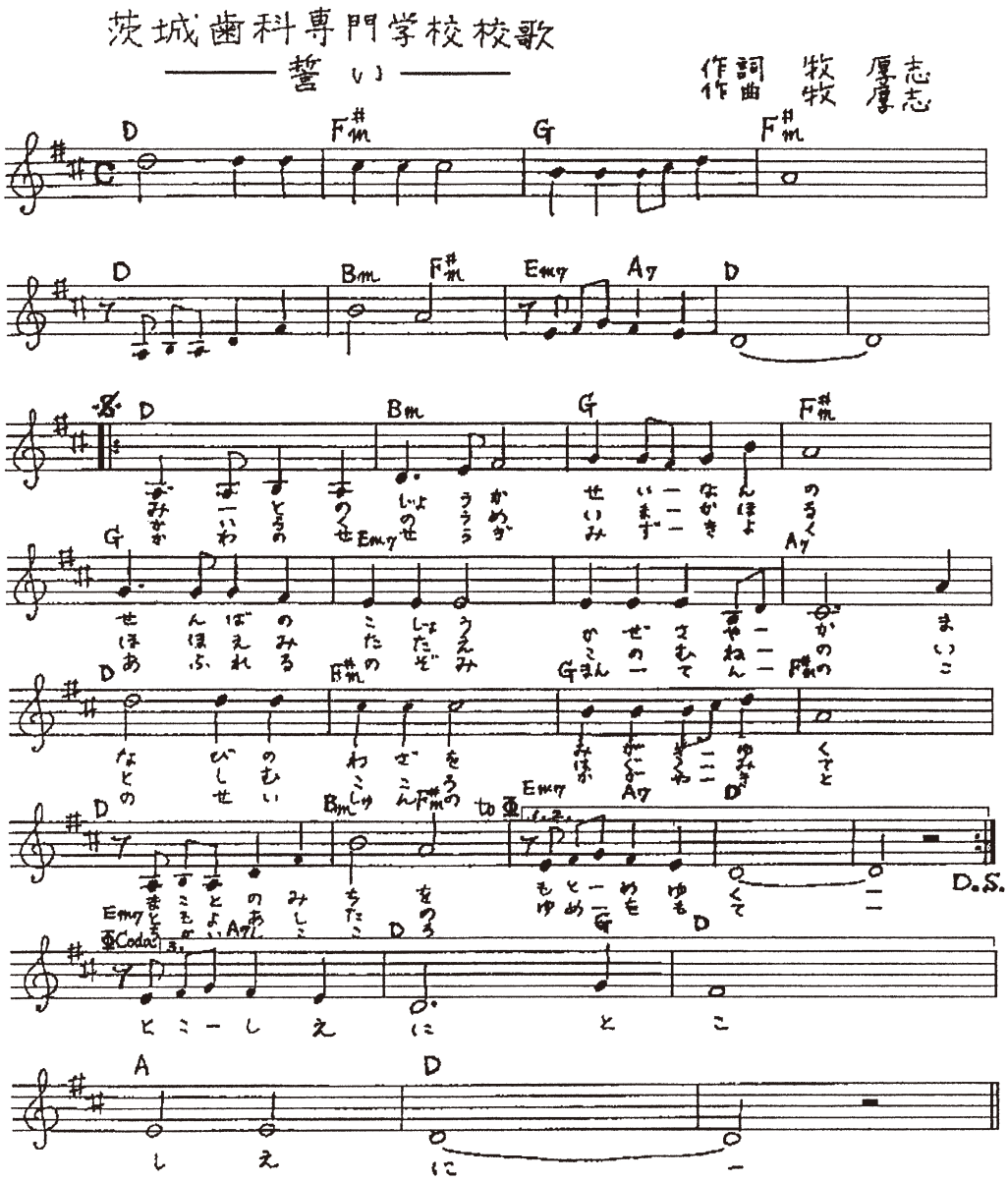
1．常に自分の最善の力をつくして歯科衛生の向上につとめます。

1．技術をみがき，知識を吸収することにつとめます。

1．常に勇気を以て自分の学んだことを実行します。

1．公共の場所では調和を守り，十分な共同のもとに仕事をすすめます。

1．診療の機会に見聞した患者さんの個人情報を守ります。



茨城歯科専門学校校歌

誓い

作詞 牧 厚志
作曲 牧 厚志

水戸の城下 西南の
千波の湖上 風さやか
学びのわざを 磨きゆく
真理の道を 求めゆく

偕楽の梅 今香る
微笑みたたえ この胸の
愛しむ心 育みて
友よ明日の 夢をもて

那珂川のせせらぎ 水清く
溢れる希望 満天の
この青春の 輝きと
誓いし心 永久に
永久に